



# 校長室だより

校長 山崎 聡子

## 大きな節目に思うこと

3月に入りました。年が明けて、早いもので、もう3月。時間は待ってはくれず、刻々と過ぎていきます。

希望に胸を膨らませて迎えた4月に新しい友達、先生との出会いがあり、今日までクラスの仲間を中心にしながら、今年は、こんなふうにご過ごしたい、こんな自分になりたいという思いをもちながら、日々を積み上げてきたことと思います。日々という言葉で一括りにしてしまうと味気ないことですが、その中をのぞきこんでいけば、たくさんのドラマが生まれてきたことと思います。その一つ一つが自分自身を創り上げてきたことと思います。

子供たちが積み上げてきた日々の一つ一つの足あとが見えるようにと掲示の工夫をしている中の一つに、19日に卒業を迎える6年生の日々の写真の記録が3階に上がる階段の壁一面に掲示されています。写真の中に写しだされた一人一人のすてきな表情を見ながら、その時にどんなことを感じたのか、どんなことを考えたのか、どんなことを思ったのか、仲間と共にどんな景色を見ることができていたのかなど、立ち止まって、思いを巡らすことがよくあります。1枚の切り取られた写真の中にさえ、多くの思い出がぎっしり詰まっています。その時の子供たちにしかわからないすてきなことがたくさんあるのだろうと思います。

1年生から5年生までは、年度末を迎える3月。6年生は小学校生活最後の締めくくりを迎える3月。この3月は1年間の中でも大きな節目の時期だと思っています。自分たちが積

み上げてきたことを振り返りながら、一人一人が着実に成長できていることに自信をもって、次につながるいい締めくくりができるようにと子供たちを支えていきたいと思っています。

文部科学省 初等教育資料（2023年5月号：東洋館出版）の『話題』に次の内容が記されていました。

「初心忘るべからず」…この言葉は、室町時代、京都の文化を吸収し、庶民の芸術であった猿楽を優雅で洗練させた芸術に進化させた親子である観阿弥・世阿弥の世阿弥が表した『花鏡』に書き記されている有名な言葉である。資料には、言葉の説明が次のように記されている。

一般的に「初心」は「ものごとを始めたときの新鮮な気持ち」という意味に使われますが、本来は「技量が未熟であり失敗のこと」を指します。若いときに限らず、経験を積んでも相応の未熟さは存在します。常に学ぶことがあると自覚することが大切であることを説いた言葉です。

世阿弥は、「是非の初心忘るべからず。時々の初心忘るべからず。老後の初心忘るべからず」と説いている。つまり、「自分の未熟さを忘れるな。この初心は一生続くものだ」という強いメッセージである。

子供たちが希望に胸膨らませてスタートした新学期から今月末で迎える1年間を私自身も振り返り、「初心忘るべからず」の深い意味を自分自身に問いながら、子供たちとの関わりを見つめ直すと共に、子供たちと共に学ぶことを忘れずに、この1年間をしっかり締めくくりたいと思います。